「今年も咲いてくれるかしら」と心配ばかりして見ることができなかったボタン。たくさん咲いてくれたよ。その向こうはやはり大事にしていた利休梅

樂音

佛歴二五六五　西歴二〇二二
令和四年五月号
発行　樂音寺　住職　内藤睦雄
電話　090-3140-3931（携帯）
0553-47-3475（お寺）
FAX　0553-47-3495（只今使用不可）
寺庭　090-8643-0852（藤井牧子）

五・六月の樂音寺住職

五月六日　白拈忌　臨済寺先住職毎歳忌　於臨済寺
九日　黎子四十九日忌法要
十一日　無相教会師範会
八日・二十二日　坐禅会　朝六時三十分

六月七日　無相教会代表委員会
二十六日(日)　山梨交響楽団演奏会
チャイコフスキー交響曲第五番ほか
於県民文化ホール　感染対策万全　遠慮なくどうぞ
十二・二十六日　坐禅会　朝六時三十分

今月の掲示板

この顔を　五月の風にあづけけり

今年の冬の冷たい風を遮るでもなく、冷たさに涙が出るのもお構いなく、意地張って歩いてきても、やっぱり若葉を揺らす風はいいものです。春この時期に撒かれる消毒の匂いも、草を刈る機械の音も、今年はことのほか耳に優しく感じられます。

一年中その時の風には名前があって、菅原道真の「東風」やキャンデーズの「春一番」詩情を誘う「花風」や「花嵐」、それに禅語によく見る「薫風」。思いつくだけでもこんなにある訳ですから、その気になって調べれば楽しそう。

五月若葉の風は湿気も少なく、気持ち良い。吹く風に「顔をあづける」のだから、爽やかな風に思う存分頬を打たせているのでしょう。「この顔」「五月」「風」「あづけけり」と活舌良いか行の韻のおかげで、軽やかな余韻に浸ることができるでしょう。俳人三吉みどりの句。

臨済寺専門道場へ出立

道場出発前日になっての妻の一言には、その晩大いに悩むこととなりましたが、それでもノー天気な私は爆睡し朝でした。見ると隣の布団はもう抜け殻、「勝手に道場行きを決

めたこと怒ってるかなあ」ふと彼女の枕もとを見ると、なんと師匠からいただいた『雲水日記』という修行道場の一年を、漫画の挿絵を入れて興味深く紹介した本が、いかにもここまで読みました、と言わんばかりに開いて伏せてありました。「あちゃー」。

階下へ降り午前中総代さんに挨拶、昼過ぎに出発などのスケジュールを確認。そして二人だけになったとき。彼女は嬉々として「まず『庭詰め』ってあるのよ。その間ベートーベンのシンフォニーを一番から九番まで、頭の中で演奏、できるでしょ？七、八時間はあっという間よ。終わったら次はブラームス、そして…」昨日の不機嫌さは何処へ。とにかく「ああ、やってみるよ」と応えます。すでに実質十年を超える彼女との生活でしたから、恋人同士のように最後の逢瀬を、なんてことは皆無。その日の午後、師匠寺の副住職さんに仕事を休んでもらって、夕方臨済寺近くの宿へ同行していただきました。もう春彼岸はすぐというのに雪雲の下出発でした。

※「庭詰め」とは禅宗道場に入門を許してもらえるまで、道場玄関の上がりがまちで、二日も三日も平伏し横座りの姿勢で低頭すること。

早春賦

春は名のみの　風の寒さや
谷のうぐいす　歌は思えど
時にあらずと　声もたてず
時にあらずと　声もたてず
氷融け去り　葦は角ぐむ
さては時ぞと　思うあやにく
今日も昨日も　雪の空
今日も昨日も　雪の空
春と聞かねば　知らでありしを
聞けば急かるる　胸の思いを
いかにせよとの　この頃か
いかにせよとの　この頃か

誰もが知るこの早春賦は、黎子の好きな曲の一つでした。別れに駆け付けた彼女の弟も、そして彼女の父親も好きな歌だと後で知って思いを深くしました。

出棺の際、本堂から仁王門をくぐって霊柩車まで、通常は「往生呪」という阿弥陀さんのご加護を願うサンスクリット語の経を読むのですが、近所の方々や近しい和尚方と共にこの曲で送りました。ほぼ涙声で歌っているとき、私は歌詞の意味が別れのうた、逝ってしまう人の歌のように感じられました。

本堂から東側仁王門

厳しい寒さの真冬の頃は、どんなにか春を、と思うのですが、いざ春と聞くと冬が名残惜しい。だからまだまだその時ではない、その時であってほしくない、と。それでも既に春の兆しは確実で、「春だよ」って言われれば、胸の思いは「どうしたらいいの、今なの？ねえどうしたら？」と迫られるようなところです。この歌が春を待ち焦がれると同時に、恋のうたでもあることは以前から感じてはいましたが、あの出棺の朝、歌詞の「春」は「死」とか「別れ」「旅立ち」に置き換えられた気がします。親父たちが歌っていた昔の歌の奥深さに、悲しいけど暖かい思いがいたしました。強引な曲解かな？

編集後記

先月この後記で「痛い膝を」と書きましたら、多くの方から「膝はどお？」と気遣っていただきました。有難うございます、歳相応です。安心してください。